

第2章 GreenGift 地球元気プログラムが残したもの

奈良県

【開催概要】プログラム第1期、第3期に計6年間開催、計15回の環境体験イベントを開催しました。第1期では、里山の素晴らしを知ってもらうことを目的に、シイタケづくり、クヌギの植樹、丸太切り、竹を活用したバームクーヘンづくりなどの食事づくり、昆虫観察、自然工作などの幅広い内容を実施しました。プログラム第3期は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で何度もイベント中止を余儀なくされました。それでも外出機会が減り自然と触れ合う機会も減っている子どもたちのために、感染拡大が落ち着いた時期に里山で自由に遊ぶプログラムや昆虫・水生生物の観察会などを実施しました。2021年には地球元気プログラムの実績を含めた社会奉仕活動の功績が認められ、秋の褒章を受章しました。

【実施年度】2013年～2015年、2019年～2022年

【支援団体】GEOC

【実施団体】奈良・人と自然の会

【開催実績】15回開催・611名参加（うち子ども314名、参加率51%）

期	開催日	イベント名	参加人数(子ども人数)
第1期	2014年3月1日	やってみよう!! しいたけづくり!	53名(22名)
	2014年5月3日	わくわく! ドキドキ! お山を歩こう!	66名(36名)
	2014年7月26日	夏だ! 休みだ! 里山へ行こう! ①	67名(37名)
	2014年8月24日	夏だ! 休みだ! 里山へ行こう! ②	28名(17名)
	2015年2月28日	植えよう(クヌギ・シイタケ)! 作ろう(バウムクーヘン)!	89名(51名)
	2015年7月25日	夏だ! 休みだ! 里山で遊ぼう!	73名(47名)
	2015年8月22日	ワクワク! ドキドキ! 里山で遊ぼう!	78名(43名)
	2016年2月27日	植えよう(クヌギ・シイタケ)! 作ろう(バウムクーヘン)!	114名(39名)
	2016年7月23日	「夏だ! 休みだ! 里山で遊ぼう! ①」～飯盒炊飯&昆虫観察&自然工作	78名(41名)
	2016年8月20日	「ワクワク! ドキドキ! 里山で遊ぼう! ②」～飯盒炊飯&里山の探検&自然工作	67名(35名)
第3期	2020年7月18日	「夏だ! 休みだ! 里山で遊ぼう! ①」～昆虫観察&自然観察&里山遊び	20名(6名)
	2021年7月17日	「夏だ! 休みだ! 里山で遊ぼう! ①」	33名(17名)
	2022年5月28日	わくわく! ドキドキ! お山を歩こう!	8名(6名)
	2022年7月23日	「夏だ! 休みだ! 里山で遊ぼう!」	23名(13名)
	2022年8月27日	「夏だ! 休みだ! 里山で遊ぼう!」	28名(16名)

第2章 GreenGift 地球元気プログラムが残したもの

宮崎県

【開催概要】プログラム第1期から3期に計7年間、計8回の環境体験イベントを開催、地域の環境課題を学べる動画を制作しました。環境体験イベントとしては第1期から宮崎県内の河川の自然環境や生き物について学ぶことを目的にホタル鑑賞、ヤマメの採卵・人工授精見学、ウミガメの産卵から水辺で遊ぶための安全学習や水辺の生き物の保全活動などを実施しました。プログラム第3期は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から活動内容をツール開発に切り替えました。具体的には河川の絶滅危惧種について学び、どんな活動を通して保全を行っているのか、団体として取り組む人と生き物が共存するための川づくりについて知ることができる動画を制作しました。

【実施年度】2014年、2016年～2019年、2019年～2022年

【支援団体】EPO九州

【実施団体】特定非営利活動法人大淀川流域ネットワーク

【開催実績】8回開催・555名参加（うち子ども263名、参加率47%）、ツール開発3種

	開催日	イベント名	参加人数(子ども人数)
第1期	2015年5月17日	カヌーと雨を体験しよう	128名(46名)
	2015年8月23日	五感を使って川を楽しもう!	197名(89名)
第2期	2017年6月3日	北川に学ぶ洪水対策とホタル観賞	47名(30名)
	2017年7月22日	大淀川のたちとウナギつかみ	39名(25名)
	2017年11月25日	いのちの授業と水質調査	42名(25名)
	2018年5月20日	防災(ぼうさい)と環境(かんきょう)in宮崎	30名(9名)
	2018年12月2日	身近な川を楽しもう	26名(13名)
	2019年4月28日	身近な川を楽しもう	46名(26名)
第3期	2020年10月1日 ～ 2021年9月30日	【ツール開発】大淀川の川原に育つ絶滅危惧植物の保全(活動編・カヌー編)	
	2021年10月1日 ～ 2022年9月30日	【ツール開発】もっと川を知ろう!人と生き物にやさしい川づく	

第3章 GreenGift 地球元気プログラムを支えたもの

この章では、地球元気プログラムの取り組みを支えたEPO、日本NPOセンターの「支援機能」を紹介します。

ここでいう「支援機能」とは、各プログラム関係者がもつ情報・人材・専門性を他のプログラム関係者間に共有し仲介することで何らかの変化をもたらすことを指します。地球元気プログラムは「全国で」「安全に」「地域の多様なニーズに合わせて」「関係者を巻き込みながら」「価値ある体験活動を」という複数の難易度の高い目標を設定していました。この目標を達成するためには、地域の環境NPOと部・支店の間に入って調整し、リスクを未然に防ぎ、方向性を助言する機能が不可欠でした。



1.協働を生み出し、活性化させるプロセスづくりの支援

地球元気プログラムに参加した環境NPO、東京海上日動の部・支店の多くは、このプログラムで初めて地域での協働取組にチャレンジしました。協働をつくっていくためには、組織の形態から地域への興味・関心まで、多くの点で異なる組織同士が信頼関係をつくりお互いに主体的にこのプログラムに関わるプロセスをつくる必要があり、このプロセスづくりをEPOが担当しました。

EPOは、環境体験イベントの開催に向けた打ち合わせの場、イベント準備、イベント当日、終了後の振り返りに参加して、両者がお互いの思いや考えを共有できるようにサポートしました。例えば、地域の環境課題に対する環境NPOの強い想いが部店・支店担当者に伝わっていない場合には補足し、部店・支店担当者が企業として押さえておきたい懸念や不安をくみ取って環境NPOに伝えて対応を検討するようにフォローするなどの取り組みです。活動フィールドの下見や環境体験イベントの様子を動画で記録するなど、言葉だけではイメージしにくい環境体験活動の価値を共有する工夫も行いました。こうして環境NPOと東京海上日動部・支店の2者間だけでは解決しにくい課題や認識のずれをEPOが入り調整することで、協働のプロセスを整えていきました。このプロセスによって協働の取り組み経験が少ないNPOと企業による環境体験イベントの実現につながり、環境NPOと東京海上日動部店・支店にとって、地域の活動において重要なマルチステークホルダープロセス(対等な立場で議論し解決の難しい課題解決のために取り組むプロセス)の経験を重ねることにもつながりました。こうしたプロセスを経て、環境NPOや東京海上日動の部・支店が地域の人や自然環境といった資源を知ることができたことも大きな財産となりました。



2.地域の環境課題解決につながるチャレンジ支援

環境NPOの多くは、地球元気プログラムに参加することで、企業との協働、地域の環境課題解決につながる新しいテーマやプログラム内容、運営方法にチャレンジしました。これは環境活動を促進するためノウハウやネットワークを持っているEPOが伴走支援することによって支えられていました。

地球元気プログラムは、環境体験イベントの内容を「環境NPOの専門性を活かした地域の環境課題に沿った屋外の体験型の活動」「植林等に限定せず、清掃や水源保全・生物調査・リサイクルなど幅広く対象」としていました。EPOはこの自由度の高さを活かして「従来の環境体験活動をアップデートしていきたい」「もっと地域で活動する市民、団体と協力していきたい」といった環境NPOのチャレンジ精神を後押しして、企画立案、東京海上日動部店・支店との共有、実際のイベント開催準備、運営面まで、実現につながるようサポートしました。プログラム第3期で新型コロナウイルスの感染拡大の影響により環境NPOがオンラインイベントの開催や動画や冊子の制作に取り組むことになった際にも、EPOが持つ事例やノウハウを共有したり、実際に使用する機材を持って活動現場に駆け付けるなど、その実現をサポートしました。

少人数で運営され、財政基盤も弱いNPOにとって新しい活動に取り組むことは大きなチャレンジです。この時に、手堅く従来の活動を行うのではなく、チャンスを生かして新しいことに取り組むことで、環境NPOの活動の質は向上し、プログラム終了後も残る財産となり、プログラム終了後の地域の環境課題の解決や地域の環境に関わる人・個人の広がりを生み出すことにつながりました。

3. 地域を集めて変化につなげる場づくり

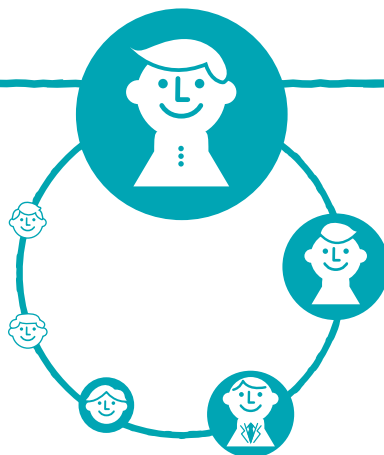
地球元気プログラムは、環境体験イベントの開催に向けて準備、実施、振り返りまでの一連の取り組みが各地域内で完結できる設計です。地域の自主性が尊重されますが、地域で生まれた成果や課題が他地域に共有しにくいという課題がありました。

そこで地球元気プログラムでは、プログラム第1期から全地域の取り組みを共有する全国振り返り会議、プログラム第3期からはブロック単位で情報交換を行うブロック会議を日本NPOセンター、EPOの企画運営で行いました。

全国振り返り会議は、各地域の取り組みと成果、実施した工夫などを全国の環境NPO、東京海上日動本社で共有することを目的に、日本NPOセンターが企画し毎年開催したものです。会議では「プログラム全体の成果」「地域ごとの成果と課題」を日本NPOセンター、各地域の環境NPO、EPOが報告、ノウハウや協働取組のポイントについて意見交換を行いました。この場は、各環境NPOにとってヒントや刺激を受けられる機会であり、各地域の様子や雰囲気を東京海上日動本社と共有する機会として機能しました。この会議が生み出した実際の変化として、「3つのGift」という考え方の整理や単年度開催から複数年度開催への変更があります。

ブロック会議は、北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州といったブロック単位で行う地球元気プログラムの意見交換の場です。プログラム第3期から導入、EPOが企画し開催されました。プログラム第2期に関東の環境NPOの活動フィールドを九州の環境NPOが見学したという動きから着想されるも、残念ながら新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり一部ブロックのみの開催に終わりました。しかし、開催できたブロック会議では活動フィールドの見学と意見交換によって、環境NPO間の情報交流を深まり、各地域の取り組みのブラッシュアップにつながりました。上記の取り組みとは異なりますが新型コロナウイルス感染拡大時にはプログラム関係者の意見交換の場が開催され、プログラムの再開とコロナ禍でのプログラムの基本方針のベースが作られました。

このように、地球元気プログラムではEPOと日本NPOセンターが、地域と全国という別々の視点を持って、ステークホルダーの声を集めて変化につなげるという場づくりを行いました。これはステークホルダーのプログラムへの参加意識を高め、プログラム全体の改善も促進されるという好循環を生み出すことにつながりました。



資料編 / 環境NPO(42都道府県、64団体)とプログラム参加年

ブロック	都道府県	団体名	第1期			第2期			第3期		
			2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
近畿	大阪府	特定非営利活動法人シニア自然大学校									
		特定非営利活動法人日本パークレンジャー協会									
	兵庫県	ゆめさきの森公園運営協議会									
		特定非営利活動法人宝塚NISITANI									
		やしろの森公園協会									
	奈良県	奈良・人と自然の会									
		特定非営利活動法人宙塾									
	和歌山県	特定非営利活動法人Blue Ocean for Children									
公益財団法人吉野川紀の川源流物語											
中国	鳥取県	特定非営利活動法人未来守りネットワーク									
	岡山県	特定非営利活動法人フォレストフォーピープル岡山									
		認定特定非営利活動法人 おかやまエネルギーの未来を考える会									
		ミズシマ・パークマネジメント・ラボラトリー									
	広島県	特定非営利活動法人自然環境ネットワークSAREN									
		特定非営利活動法人三段峡-太田川流域研究会									
	山口県	スリー・ヒルズ・アソシエイツ									
四国	徳島県	特定非営利活動法人新町川を守る会									
		一般社団法人かみかつ里山倶楽部									
	香川県	特定非営利活動法人アーキペラゴ									
	愛媛県	特定非営利活動法人どんぐり王国									
	高知県	特定非営利活動法人砂浜美術館									
九州	福岡県	北九州ESD 協議会									
	佐賀県	特定非営利活動法人元気・勇気・活気の会									
	長崎県	特定非営利活動法人環境保全教育研究所									
	熊本県	特定非営利活動法人水のとらベル隊									
	大分県	特定非営利活動法人緑の工房なぐらす									
		特定非営利活動法人エービーシー野外教育センター									
	宮崎県	特定非営利活動法人大淀川流域ネットワーク									
	鹿児島県	特定非営利活動法人Panda									
	沖縄県	一般財団法人沖縄県公衆衛生協会									

